鳥取市文化財報告書Ⅱ

伊勢谷 湯谷 遺跡発掘調査報告書

1975

鳥取市教育委員会

はじめに

伊勢谷、及び湯谷は、市街地の南約6kmの「上の山」からそれぞれ発し合流して邑美平野に面した二つの谷である。

昭和48年にこの地に隣接した久末、古野家地区において、邑美土地改良事業の圃場整備工事実施中に多数の弥生式土器が出土したため、緊急発掘調査を行ない古代の生活を物語る遺構の数々を記録したが、今回発掘調査を行なった伊勢谷、及び湯谷地区は昭和50年度圃場整備事業計画区であるため、昭和49年度に事前調査を実施したものである。

元来、この地は米里（よねさと）といい、土地肥沃な米作地帯で、湯谷には温泉が湧いていたとも伝えられている生活環境の適地でもあり、両谷入口の菌蕈研究所建設に際しても古代の土器、石器類が多数出土した記録もあって、かねてからこの地域一帯は原始古代の生活文化の歴史を解明する重要な地域であると考えられていたところである。

加えて、この地を大きく囲む因幡地方でも最古といわれる六部山３号前方後円墳、また最大規模をほこる古郡家１号前方後円墳、線刻壁画をもつ空山古墳群 等、鳥取市周辺の古墳群のなかでも著しい特色をもったものがこの地域に集中していることからも、このことをうかがい知ることができる。

このたびの調査によってこれらを裏付ける多数の出土遺物、生活遺構が発見され、収集記録できたことは、この調査の大きな成果であり、鳥取市の古代史解明に重要な役割をはたす資料となるものと確信する。

今後、古代遺跡群ともいえるこの周辺一帯について、さらに発掘調査の機会を得るならば、今回の調査結果と相まってこの地方の古代生活文化の全ぼうが明らかになることであろう。

この発掘調査の実施にあたっての関係各位のご指導、ご協力に深甚なる感謝と敬意を捧げるものである。

昭和５０年３月

鳥取市教育委員会教育長　濱　本　　愿

目　　次

はじめに
Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　発掘調査に至る経過 …… 3
Ⅲ　遺跡の状況と出土遺物 …… 4
　1　伊勢谷地区 …… 4
　2　湯　谷地区 …… 9
Ⅳ　地形及び地質について(豊島吉則) …… 16
Ⅴ　まとめ …… 25

挿図の部

挿図1　遺跡の位置と周辺 …… 1
挿図2　伊勢谷Ⅱ区実測図 …… 5
挿図3　伊勢谷Ⅱ区出土遺物土師器 …… 7
挿図4　伊勢谷Ⅱ区出土遺物須恵器 …… 8
挿図5　伊勢谷Ⅱ区出土遺物鏡 …… 8
挿図6　湯谷Ⅰ区Bトレンチ実測図 …… 10
挿図7　湯谷Ⅱ－A出土遺物 …… 10
挿図8　湯谷Ⅱ－Aトレンチ実測図 …… 11
挿図9　湯谷Ⅱ－Bトレンチ実測図 …… 13
挿図10　湯谷Ⅱ－B出土遺物 …… 15
挿図11　古郡家付近の地形区分 …… 17
挿図12　伊勢谷・湯谷横断面実測図 …… 19
挿図13　伊勢谷・湯谷谷底平野の内部構造 …… 19
挿図14　伊勢谷地区のトレンチの層序 …… 22
挿図15　湯谷地区のトレンチの層序 …… 23
挿図16　湯谷の模式断面 …… 24
挿図17　調査位置図 …… 26

図　版　の　部

図版１　遺跡地航空写真 …… ２７
図版２　伊勢谷Ⅱ地区トレンチ及び試掘坑 …… ２８
図版３　伊勢谷Ⅱ区遺物出土状況 …… ２９
図版４　湯谷Ⅱ－Ａ区 …… ３０
図版５　湯谷Ⅱ－Ｂ区 …… ３１
図版６　伊勢谷Ⅱ区土師器 …… ３２
図版７　伊勢谷Ⅱ区須恵器 …… ３３
図版８　湯谷地区遺物 …… ３４

湯谷発堀調査風景

調査団の組織

団長	濱本　愿	
指導・助言者	豊島吉則	(鳥取大学教授)
	治部田史郎	(県博物館学芸員)
	加藤	(県教委文化課)
調査員	奥村淳一　田村章三	
	山本拓　井上清司	
	杉谷愛象　岡庸一郎	
	小杉宗雄　若林久雄	
協力者	吉田かおる	
	米里長生会	他

凡例

報告書作成に関する分担

1．今回の調査目的は、伊勢谷・湯谷両地区における遺跡の性格と遺構の分布状況を把握し、これを保護することが基本となっている。

2．各調査区のトレンチ設定は磁北に対して東西及び南北にとったが、湯谷Ⅲ区トレンチは谷に直交するかたちで随意に入れたものである。

3．本書の作成についての分担は次のとおりである。

(イ) 全体的総括者　杉谷

(ロ) 執筆者　岡・小杉

(ハ) 実測図作成者　岡・山本・小杉

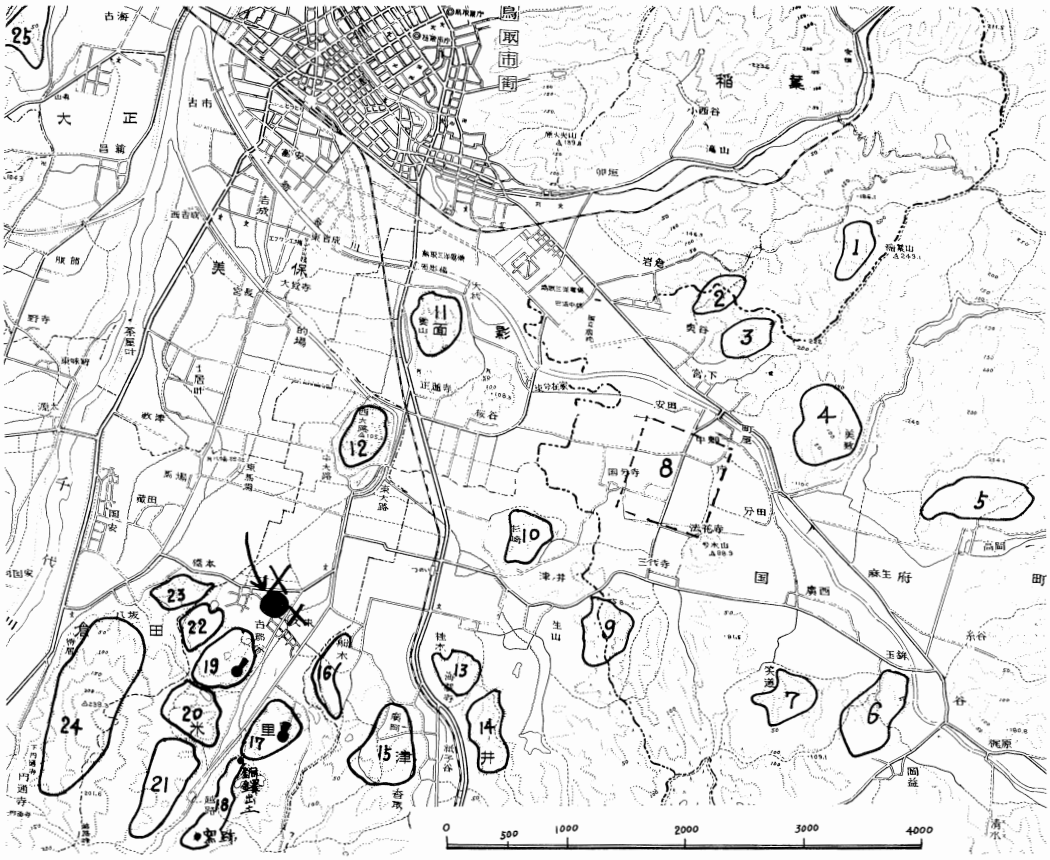
(ニ) トレス作成者　吉田

(ホ) 写真撮影者　山本

4．植物の鑑定については県博物館清末忠人氏、鏡については鳥取大学々生斉藤誠君の御協力を頂いた。

Ⅰ. 遺跡の位置と環境

鳥取市の所在する鳥取平野は、中国山地より日本海に注いでいる千代川によって形成された沖積平野である。



挿図1　遺跡の位置と周辺

1. 滝山古墳群
2. 岩倉古墳群
3. 奥谷古墳群
4. 宮ノ下古墳群
5. 美歎古墳群
6. 岡益古墳群
7. 笑道古墳群
8. 推定因幡国府域
9. 生山古墳群
10. 杉崎古墳群
11. 面影山古墳群
12. 大路山古墳群
13・14. 桂木古墳群
15. 広岡古墳群
16・17. 六部山3号前方後円墳と六部山古墳群
18・21. 越路古墳群
19. 古郡家1号前方後円墳と古郡家古墳群
20. 園原古墳群
22. 美保古墳群
23. 橋本古墳群
24. 八坂古墳群
25. 山鼻古墳群

✕ 古郡家・久末遺跡

この沖積平野の南部丘陵中央の谷底平地と、平野との接するあたりは、東側、南側、および西側の三方向をなだらかな丘陵に囲まれており、さらに北側には面影山、北面部には大路山、南と東南部は丘陵に囲まれている。そして、北東部には袋川、南西部には千代川によってそれぞれ開かれた平地が拡がっている。これらの平地は、周囲と比べると一段低くなっている。つまり、袋川の運んだ土砂が、自然堤防を形成しその内側に粘土質のものが流れこんだために低い粘土質の平地が形成されたものである。また千代川も、袋川と同様な自然堤防を形成し、作用を及ぼしてきた。

こうして形成された粘土質の低地帯は、水もちが良く、初期の水稲栽培に好適地と考えられる。このようにして見れば、この平地は農耕を行なうにあたっての自然的地理的条件が、他の地帯よりもかなり良いのである。すなわち、当時の経済的実力は、その基礎的な生産は農業である。だから、農耕を行なうのに自然的・地理的条件が他の地帯より良かったであろうこの平地は、弥生時代以後、共同体制を破りつつあった共同体の指導者＝支配者が、古墳を造るまでに発展し、自己の共同体構成者、及び他の共同体を配下に置き得るまでに発展したのである。これらの事を推定できるものに、多くの古墳がある。現在確認されているものだけでも、鳥取平野を囲む山地丘陵部には約25個の古墳群、合計約 1,200基の古墳が存在する。

この平野に、いつの時代のころから人間が住みついたのかは、はっきりしていないが、平野全域の出土遺物からみると、縄文時代にまでさかのぼることができる。以後、鳥取平野に生活の基礎を置き、文化発展の出発点となったのは、古墳時代であろうと考えられる。それは前述したように、古墳が平野を囲む全山地に密集して存在していることが示している。

今回発掘調査を行なった美和・古郡家地区は、南部丘陵中央の谷底平地と、この平野との接するあたりであり、背面にあたる南のなだらかな丘陵地である。周辺には、因幡地方最古といわれている六部山３号前方後円墳、最大の規模をもつ古郡家１号前方後円墳があり、越路には須恵器を伴出した窯跡がある。発掘現場の２つの谷、伊勢谷・湯谷は、それぞれ、舌状にのびた陵線の間のなだらかな谷である。陵線上には、数基の古墳が存在している。特に、湯谷はその昔、温泉が湧き出ていたとも言われ、名もそこのところから来ているのであろう。現在でも、雪溶けの一番早い谷である。

この地域一帯は「和名抄」によると因幡国六郡のうちの邑美郡に含まれ、更に美和郷中にあたるとしている。邑美郡は西は千代川、東は久松山から面影山の線に沿った南北に細長い郡である。古代における中心的役割をもつ郡衙の所在地については邑美郡の名の指すところから中郷地域と目されている。美和郷内には現在古郡家の地名が残っているが、この地内には注目すべき古墳とこれに附随したかたちの式内中臣崇健神社があり、古墳時代前期には有力な氏族の存在があったことを考えると、後世において郡衙がこの地へ移ったことも考えられる。

式内中臣崇健神社は上古より神廟なく林梢鬱茂の地を神居としていることは大和三輪明神と共通しており、この美和の地名との関わりを暗示しないとも云えなくはない。また播磨国加茂郡に式内崇健神社、

丹波国矢田郡には式内天照玉神々社（崇健神宮）があり、中央との関連をうかがわしめている。（いづれも因伯叢書参考）

Ⅱ．発掘調査に至る経過

「鳥取県遺跡地図」第１冊には鳥取市古郡家字伊勢谷の一角を遺物散布地の遺跡としている。この地域からは水田測溝及び溜池の造成中に石器等の遺物を採取しており、周囲の丘陵部に密集する古墳群を含めた状況から、この緩やかで狭い段丘状の谷間に遺跡の存在が十分推定されている。

また昭和48年度に発掘調査した久末・古郡家遺跡は、この伊勢谷遺跡と接する位置にあり、弥生時代から古墳時代に至る掘立状建築遺構及び土坑墓を検出し、更に古郡家地区においては丘陵部洪積台地北端の一部を確認しており、同時に磨製石斧等の石器類を多数採取している。

これらのことを含め平野を一望のもとに眺めることのできるこの地域において丘陵部から北向きに延びる支脈と狭少な谷間部には、鳥取平野を生活の場とする人々の文化発展の変遷を知る資料が豊富に存在することは確かである。

しかしながら鳥取平野における穀倉地帯であるこの一帯は、鳥取県の実施する五ケ年計画に基づくほ場整備による水田耕作の合理化が行なわれている。久末・古郡家遺跡はこの工事中に発見されたものであったが、すでにその遺構のほとんどは、それによって消失していた。

古郡家・美和両地内に含まれる県道八坂正蓮寺線の南部の伊勢谷と湯谷の水田部は昭和50年度のほ場整備事業の一環として実施されることになっており、特に段丘状の地形をもつこの谷は、平野と比べて相当な地形の変更を伴う工事が実施される可能性があった。そこで鳥取市教育委員会では、この地域の遺構がこれらの工事によって決定的な破壊と消滅を被ることを避るため、この工事に先だって伊勢谷とその西側に隣接する湯谷の遺跡調査を実施し、その保護と保存を計ることにしたものである。

調査は伊勢谷・湯谷地区を合せ約40,000平方メートルの地域で第１段階として遺構の分布範囲を確認するため各所にトレンチ発掘をすると共に地層状況把握の試掘坑を三ケ所に設定した。

伊勢谷・湯谷を大きく各々３区に分け、それぞれの区内において微高な丘陵台地上と推定される水田地に、地形に応じて東西又は南北方向に幅２メートルのトレンチを入れた。

この結果、遺構の確認しえた地区は伊勢谷１ケ所、湯谷２ケ所で小ピット群と土坑墓状の遺構を検出した。

調査は昭和49年10月30日に始まり12月下旬には一応の分布状況を把握したが、翌50年１月以降は積雪のため調査は進行せず小康状態が続き３月に入って伊勢谷Ⅱ区の南北トレンチの発掘を実施し、当初の計画に基づく調査を完了した。

Ⅲ．遺跡の状況と出土遺物

1．伊 勢 谷 地 区

伊勢谷地区は調査の便宜上大きく３区に区分し、南部をⅠ区とし、中ほどをⅡ区、北部をⅢ区とした。

〔Ⅰ　区〕

Ⅰ区については伊勢谷と湯谷の中間に丘陵から舌状に北に張り出した台地状尾根の中腹東斜面の台地水田部に東西トレンチを入れた。このトレンチ設定は、低湿地を避け微高台地に何らかの生活遺構を探るためである。トレンチ西端は山地に接し耕土の下に黒色土がわずかに堆積し、東側谷の中央部に接近するに従って厚みをもち、黒色シルト層の下層は淡褐色粘土の地山となり谷に向い緩かに傾斜している。この第２層にみられる黒色シルトは地山褐色粘土が混入した状態で、後世に土地造成が行なわれている。遺構はトレンチ東寄りに径 1.2メートルの浅い土坑が検出され、暗灰色腐蝕土が黒色土に落ち込んでいる。

遺物は土師質で細片のものが黒色土層よりごく少量採取されたのみである。

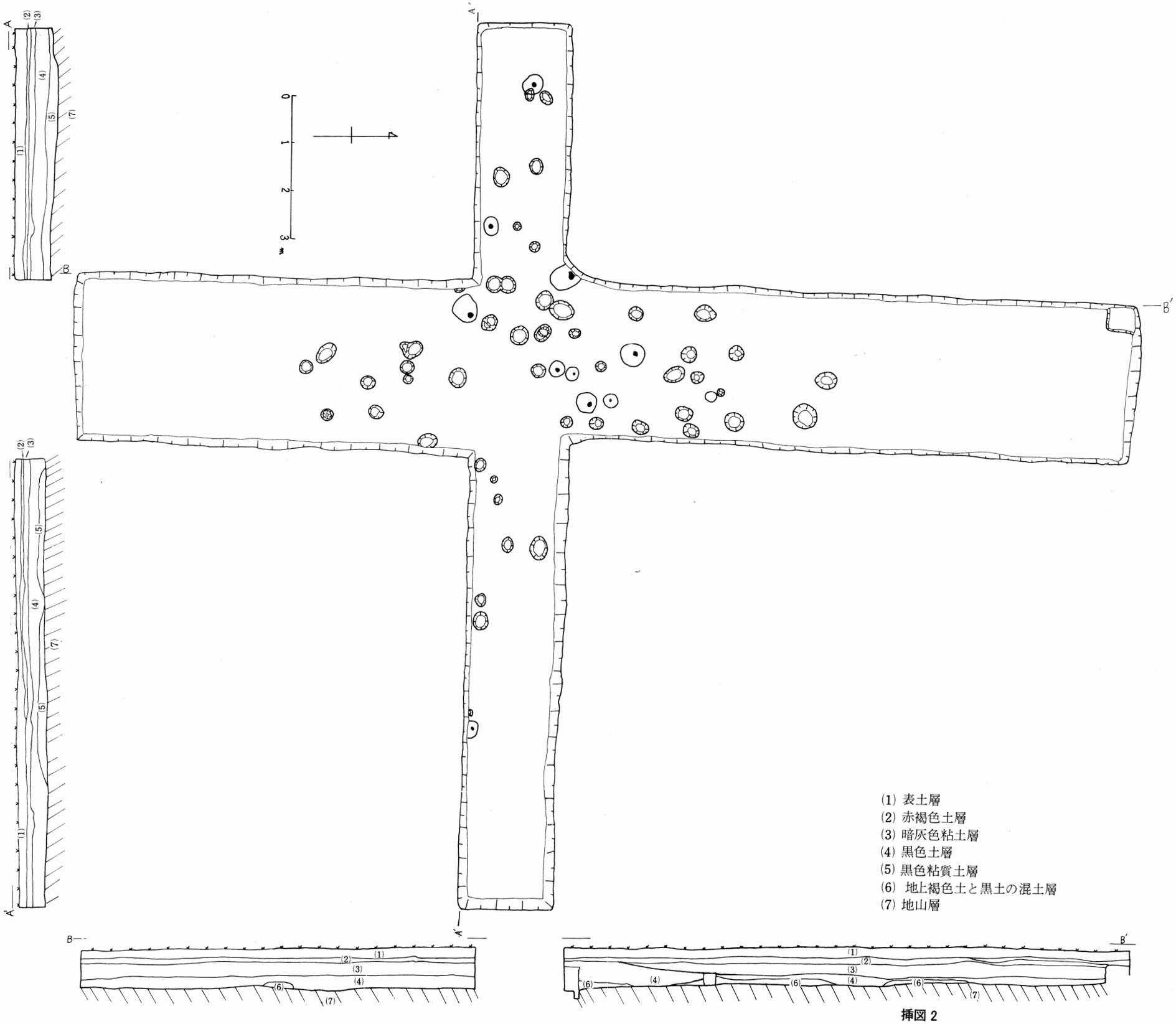
なお、このトレンチより東北の谷間中央部に地層観察用の坑を入れ、地層の変化を探ったが、現地表下約30センチで淡褐色粘土の地山になり、後世において相当の開墾等の造成があったことを想像させた。

〔Ⅱ　区〕

調査地は伊勢谷北東隅の現在古郡家部落北端と接する位置で西向きの段丘状斜面の水田地である。当初古郡家部落のある台地の裾部で遺構の存在について地理的に有力視した所でもある。このことから地層把握により遺構を探る坑を３×３メートルの規模で掘り下げた。（図版２）この結果地山と目される層は、Ⅰ区の地層観察坑と比して2.3メートルの格差をもつ深さで検出された。この地山層の上層は黒色粘土層で遺物包含層となっており、この層より鏡の断片が出土した。その他細片ではあるが須恵器、土師器が出土し、付近に遺構の存在をうかがわしめた。

そこでこの北側寄りに東西方向に幅２メートルのトレンチを入れ、丘陵台地の端と遺構を探った。耕作土に続く赤褐色の浅い層の下層は３層からなり第３層暗灰色粘質土層を排除すると柱穴状のピットが現われた。このピットには支柱の残存するものが多く、その保存状態は支柱の底部ほど良好で材質もしっかりしている。（支柱の残存していたものは挿図２の●印で表わした。　図版２。）支柱の加工については自然木をそのまま表皮を剝して使用し、切断には、斜めからの切込みを加え、丸味をもった形に仕上げているところから鉄斧等の利器を利用したものと思われる。ピットはいずれも第４層から第５層地山層を穿って深く埋め込まれている。

これらのピットについては、その配列及びつながりを把握できない。そこで任意点を定めこれに直交


A
A'
B
B'
0
1
2
3 m
(1) 表土層
(2) 赤褐色土層
(3) 暗灰色粘土層
(4) 黒色土層
(5) 黒色粘質土層
(6) 地上褐色土と黒土の混土層
(7) 地山層

挿図 2

する南北トレンチを設定、その間隔も 3.5メートルに広げ、遺構の性格、規模を探った。このトレンチにおいても第３層の下層から切込んだピット群と支柱の残欠を検出した。これによって柱列の把えられるものが多い。

このトレンチにおける遺物包含層は第３・４層で、細片が散在した状態で２次堆積の感が強い。特に第４層に遺物が顕著である。

〔土師器挿図３〕甕形土器、坏の蓋、高坏、高台付坏、皿に大別される。このうち甕形土器が多く高坏も比較的多い。

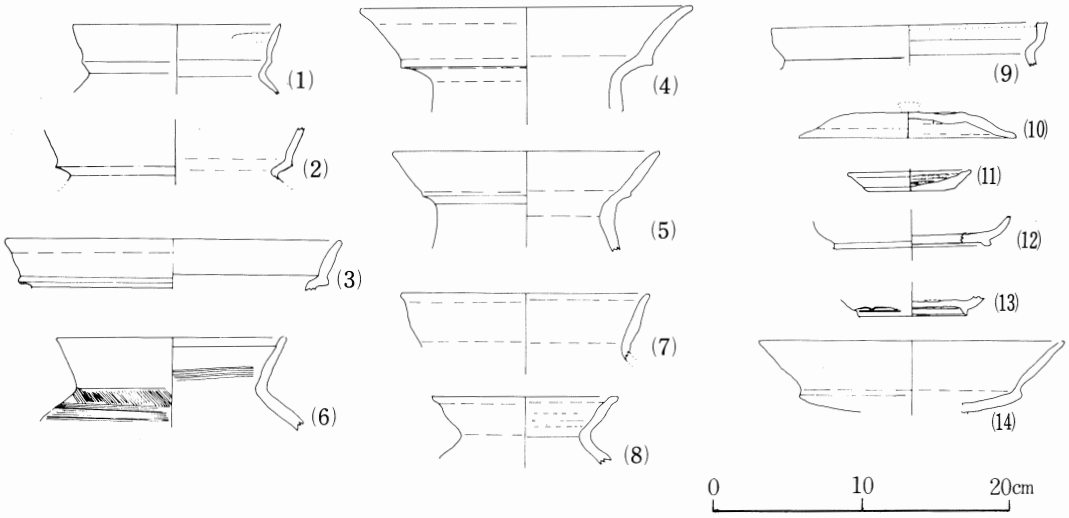
（１～５）は複合口縁をもつ甕形土器で淡褐色～灰暗色を呈し、いづれも砂粒子を含むもので器面の剝落がはげしく軟質でもろい。

（６～８）はいづれも淡褐色を呈し胎土は砂粒子を含まず緻密であるが比較的やわらかい。内面は指やヘラによる整形を施し器面は無文のものと頸部から肩部にかけて斜めと横のハケ目を入れたものが見うけられる。

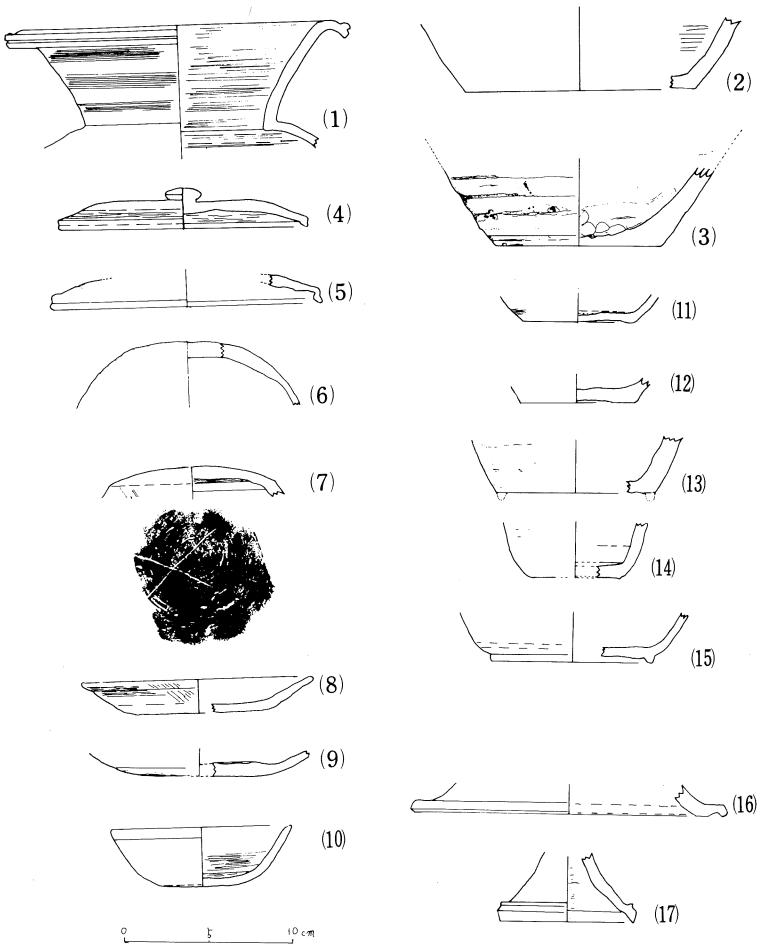
(9)は湯谷Ⅱ－Ａ区出土と同類のもので頸部を「く」の字に外反させ、口縁端を垂直に立ち上らせている。

(10)は土師質の蓋で内面は指圧整形の凹みがみられる。胎土は砂混りで淡褐色を呈するが、焼はかたい。

（12～13）は硬質の土師質土器で低い高台付の坏で底部はいづれも糸切技法がみられる。高台接合が外面からもうかがわれる。



挿図３　伊勢谷Ⅱ区出土遺物土師器



挿図4　伊勢谷Ⅱ区出土遺物須恵器

〔須恵器〕挿図4

壺、甕、坏蓋、坏、高台付坏、高坏などに類別できる。

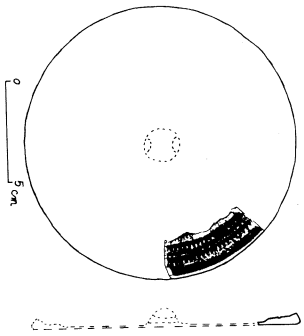
(1)は南北トレンチ南端第4層より出土したもので、青灰色を呈し若干砂混りであるが、内外面ともハケ目調整による丁寧な仕上げをしている。口縁端は大きく外反さるとともに頂部からやや下降させ、その先端部を肥厚し篦による凹線を施している。

（4～7）は蓋で、内面は指圧による渦巻様の凹みがみられ、ロクロ等の使用が考えられる。

(2)は宝珠形のつまみをもち接合部は若干肥厚し、内外面とも指・ハケによる整形をしている。

(7)は長さ5～6センチの「×」印の線刻がある。

坏類として（8～15）があり、淡灰白色～暗灰青色を呈す。糸切り技法による底部をもつものが大半をしめている。(13)(15)はそれぞれ貼り付・削り出しの高台を付けるものである。



挿図5　鏡実測図

鏡の外縁部断片一点をⅡ区試掘坑から採取している。復元半径6.7センチ、縁部厚さ 0.5センチ、外区幅 1.8センチを計るもので、色調は黒色を呈し銅と錫からなる青銅製のもので、その形は三角縁で、重圏鋸歯文帯を施した鏡である。（挿図5　図版4－19）

2. 湯 谷 地 区

湯谷は伊勢谷から低い屋根をはさんで南西に細長くのびる水田地の谷である。調査地は便宜上３区に分け、それぞれ南からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。

〔Ⅰ　区〕

南東部の段丘状水田地で、東方尾根台地の円墳と近接する位置である。トレンチは尾根の延びる方向に南北に入れた。丘陵に続く地山は水田耕作土を排除した段階でＢ及びＣトレンチにおいてみられた。Ｂトレンチでは浅い溝状遺構と柱穴状ピット、及び土坑が検出されたが、水田耕作によりすでに消失した遺構も考えられる。（挿図６）

土坑は径 1.6メートルのほぼ円形を呈し深さは土肩より50を計る。埋土は黒色腐蝕土で砂礫を含み、土坑底部には径約25センチ程の自然石１点がほぼ中央部にみられた。

このトレンチの出土遺物は、そのほとんどは径３～５センチの細片の土器で、遺構との関連を知りえるものはない。図は淡黄色を呈する瓦器質の坏で糸切技法がみられる。

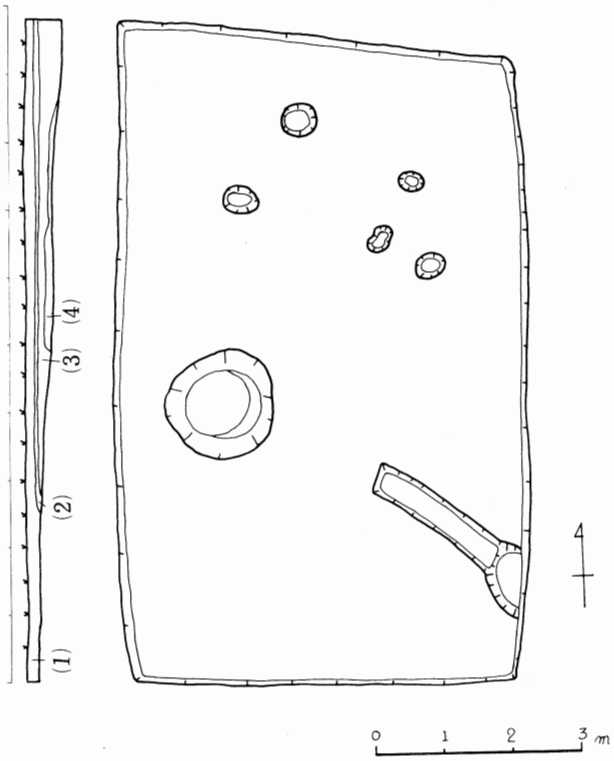
〔Ⅱ　区〕

Ⅰ区の西側、美和部落の南端で、丘陵部の裾懐で谷を一望できる水田地である。Ａ、Ｂトレンチは、東西方向に幅２メートルで同一水田境界まで入れたが、いづれも西端近くに至ると耕作土の下に地山が現われ、後世において土地造成があったことを推測させた。Ａトレンチは掘立状ピット群のみである。遺構として把えられるものもあるが、そのほとんどのピットについて機能・用途について把握するには至っていない。支柱及びその大きさもピットの断面からははっきりしない。第１遺構は主軸をＮ－45°－Ｅにとるもので柱間隔を 2.5～３メートルを基準とした掘立状遺構である。第２遺構は第１遺構ピットを切り込んで構築されている。地山褐色土との混りが多い。主軸はＮ－55°－Ｗにとり１間４間で柱間隔は 1.8～２メートルを基準としている。第３遺構は主軸をＮ－70°－Ｅにとりその間隔及び柱穴状況は類似している。

出土遺物は細片の土器で遺構と関連するものはなく、ほとんどが東寄り第２層黒色土と地山土の混土層からのもので、土地造成に際して運ばれたものと推察された。

（１）は甕形の土師器で色は暗灰色を呈し、胎土は砂混りで焼成は不良である。（２）は須恵器蓋で中央部につまみを接合させ、ていねいな仕上げをして胎土、焼成ともに良好である。（３）は平底の坏と思われ底部は糸切痕を呈し、内面はナデによるていねいなつくりで乳白色の瓦器である。(図版８の１、２）

Ｂトレンチ、Ａトレンチの西側一段高い水田部で、その西端は山地と接する位置である。遺構は掘立状ピット群と土坑で西寄りは表土排除の段階で地山褐色粘土層が現われ黒色埋土を伴ったピット群がみ



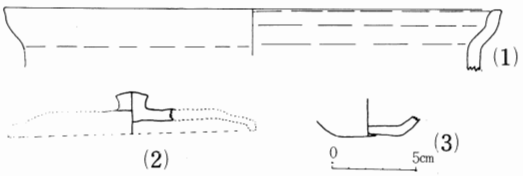
挿図6　湯谷Ⅰ－Bトレンチ

られたが中程から東寄りは暗灰黒色と黒土層が地山上に堆積したかたちで緩く傾斜し、遺構は地山を穿っている。掘立状遺構として把えられるものは主軸をN－35°－Eにとる1間4間でP1～P2方向の柱間は2メートル間隔でありP1～P6は4.5メートルである。P1はその断面から径10センチの支柱が北方向（遺構の内側）に12°傾斜し、P7は径18センチの支柱がほぼ垂直に埋めこまれている。P10では底部より種子2点と草の茎及び支柱の樹皮が検出された。

土坑は長径1.1、短径0.9メートルの隅丸方形をもつもので深さは上肩より1.25メートルを計る。

底部中央には径30センチ程の自然石がみられ、湯谷Ⅰ－B区土坑と類似する。

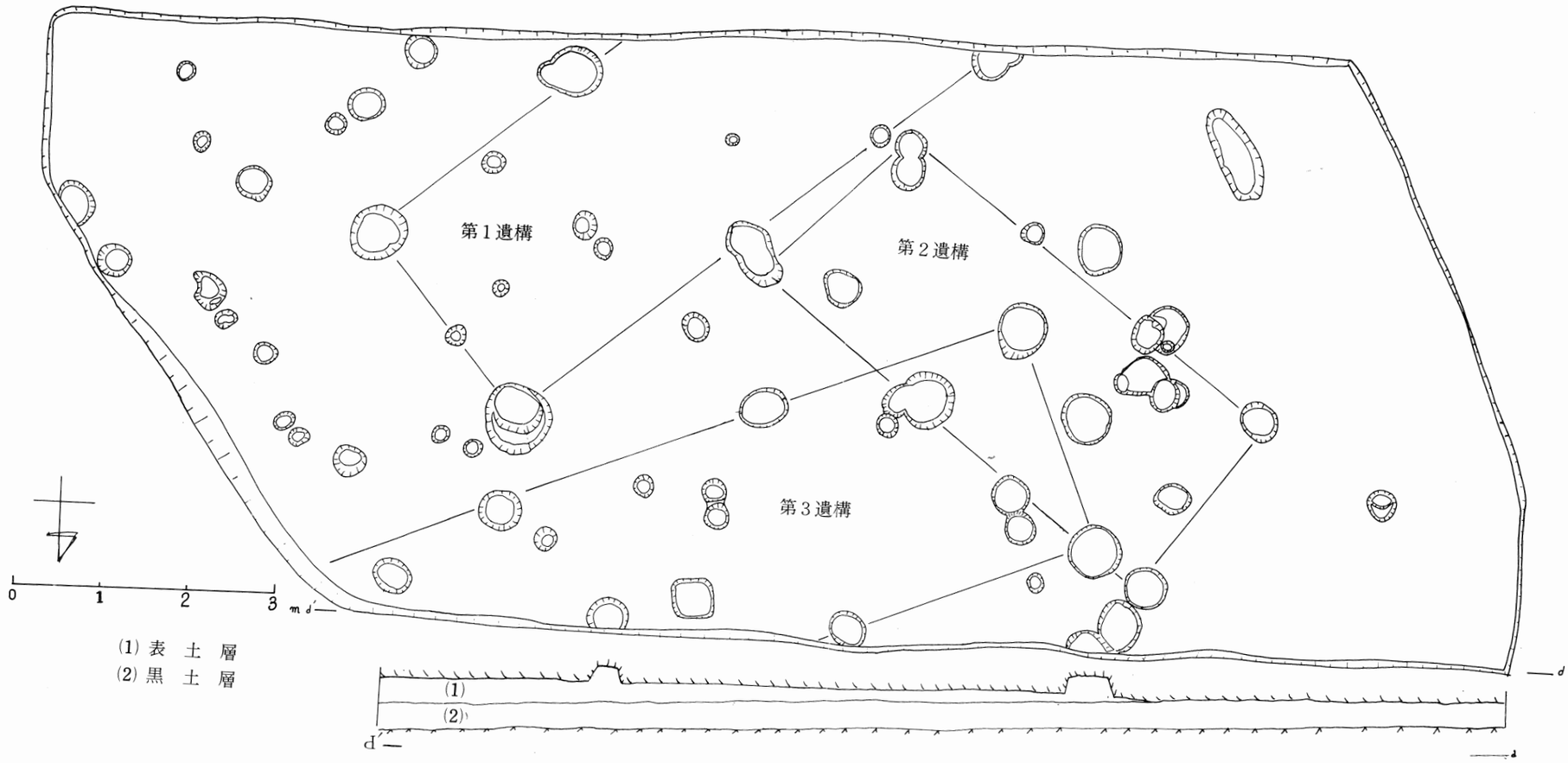
出土遺物は第2・3層においてまばらに出土しているが、遺構との関連を把える段階には至らない。



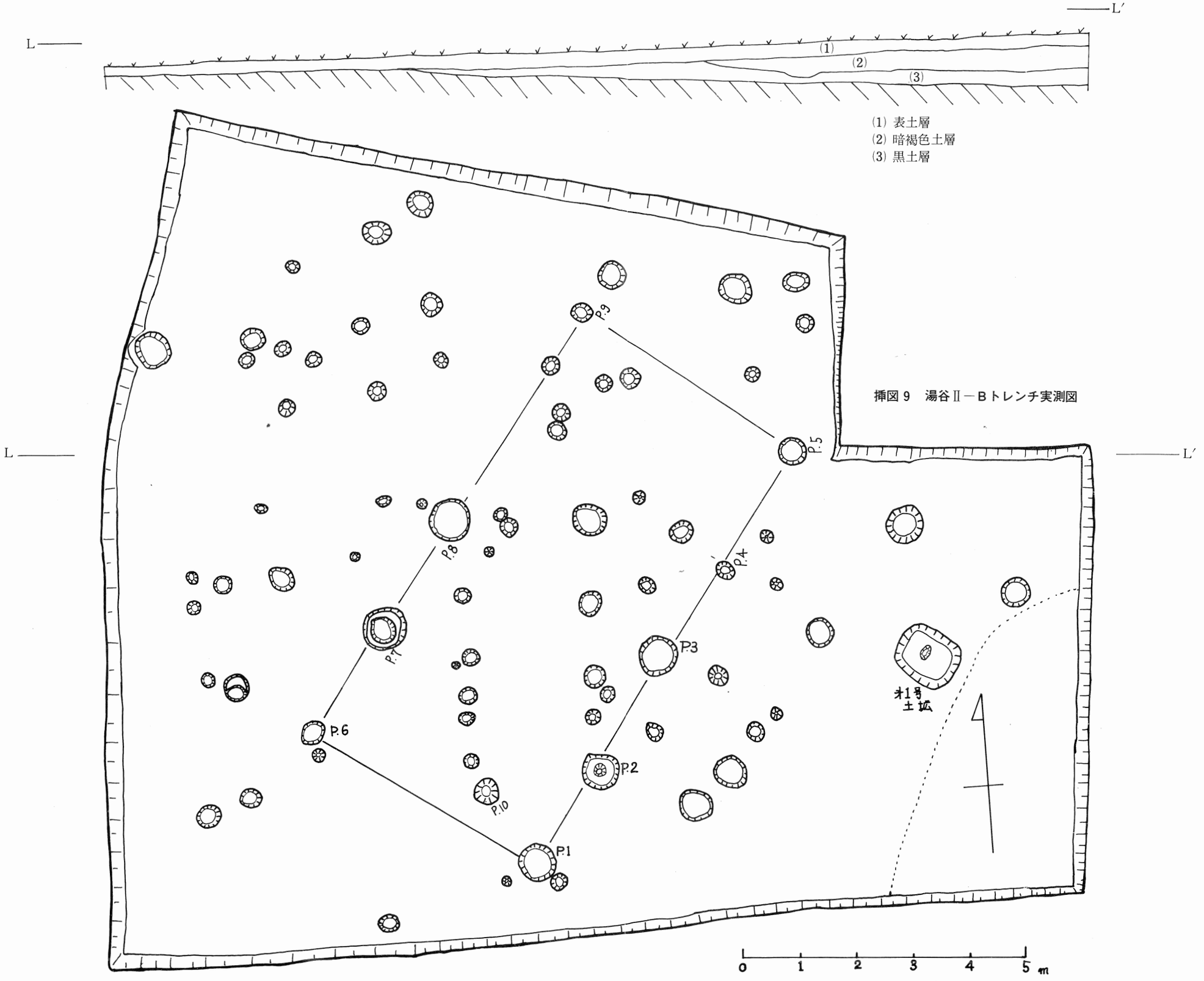
挿図7　湯谷Ⅱ－A区遺物実測図

（1図版8－3）は土師質の坏で底から口縁に立ちあがる境界に低い高台をはり付け、ヘラによって仕上げる。底部は墨書による文字が見られるが、欠失のため判読はできない。（2）は淡褐色の土師質土器で、石英砂粒子を含むが焼成は良好である。須恵器（3、4、5、6、7、8）は出土量が少ないわりには、その種類は豊富である。その大半は糸切痕をもつ古墳時代以降のものである。（9、10）は瓦器（土師質）でいづれも糸切痕を呈する。

P10からは底部埋土中より植物繊維と、炭化した種子を採集した。（図版8－5、6）。県立博物館での鑑定により、それぞれミズナラの樹皮、シソ科に属する茎、イヌガヤの種子と判明した。イヌガヤは

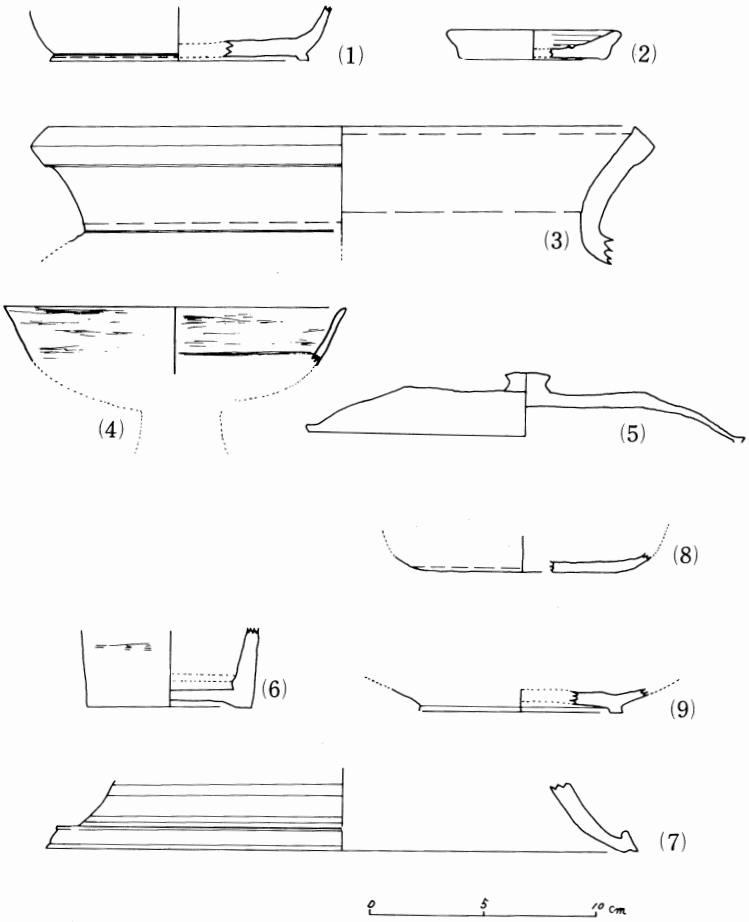


挿図8　湯谷Ⅱ－Aトレンチ実測図



挿図 9　湯谷Ⅱ－Ｂトレンチ実測図

胚乳から灯火用の油を絞り、外種皮は食用ともなるものである。保存状態から比較的新しいものと思われる。



挿図10　湯谷Ⅱ－B区出土遺物

Ⅳ．地質及び地形について

豊　島　吉　則

1．遺跡の位置

鳥取平野の南には傾斜のゆるやかな山地がみられる。霊石山北麓の山地はとくに緩勾配で北方に高度を減じ、古郡家付近で平野と相会している。この山地は第三紀の泥岩・砂岩・礫岩の互層からなり、これらの地層も北方に緩斜している。この第三系の山地は丘稜性山地の性格をもち山地の稜線部にはやや平坦な面が残存し、梨畑等に利用されている。また多数の古墳がこの山稜に位置している。山地の北方には主として海抜10ｍ以下の範囲で沖積平野が発達している。この沖積平野は主として千代川の氾濫堆積物が埋め立てて形成されたものであり、灰色～褐色のシルトが卓越している。しかし、国府町の宮ノ下、国分寺付近では袋川の扇状地堆積物が礫質の平野を形成しているし、船木・古郡家付近では小河川による堆積も無視できないであろう。

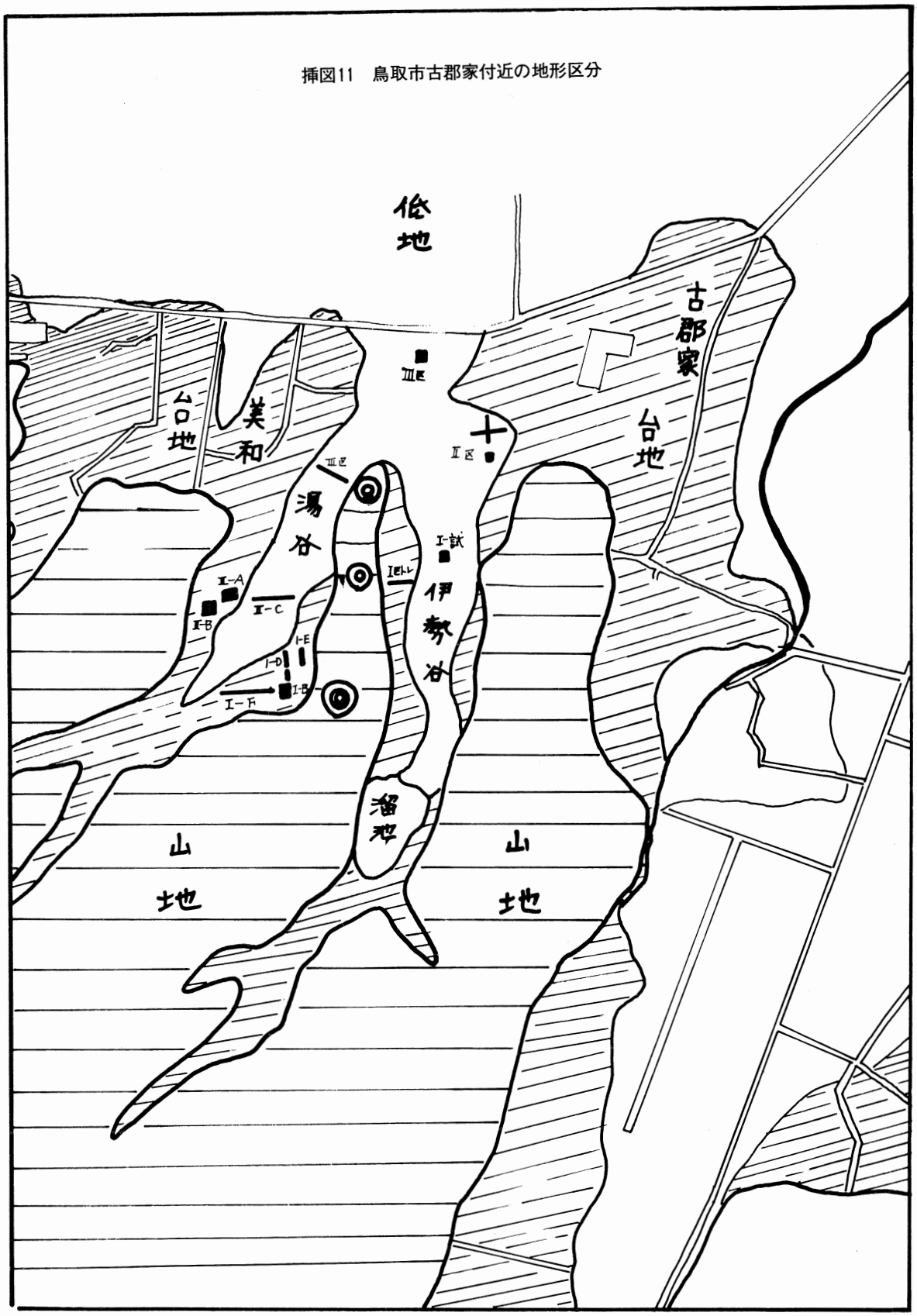
このように山地と平野と相会する場所に、東西に古い集落が連続して並んでいる。八坂・橋本・美和・古郡家・船木・桂木・杉崎・三代寺などの集落群がそれである。これらの集落は、しかし平野上でも山地上に立地するのでもなく、台地上に位置しているのである。津ノ井粘土※で知られる洪積世の粘土やロームからなる台地（海抜25ｍ以下10ｍの範囲）が、山地と平地の間に巾のせまい帯状地として発達していて、その台地は沖積平野に比べて高燥であり、かつ地盤もしっかりしているので、古い集落が立地したものと思われるのである。本遺跡地は、このように山地・台地・沖積地の接点に位置し、古い集落である美和と古郡家の中間の谷底平野に位置している。

※　津ノ井の桂木、船木付近の山麓に付着する海抜25ｍ以下の面は、表層に大山ローム、クロボクをもち、その下に洪積世の厚い粘土層がみられ、この面を津ノ井面、粘土を津ノ井粘土層と称している。この粘土層は厚さ10ｍ以上に達し、黄灰色～青灰色～白色の各層があり、若干の礫を混在したり、埋れ木を夾在したりしているが、古来津ノ井瓦の材料として利用されてきた。

2．遺跡の地形的環境

古郡家付近の地形はすでに述べたように山地・台地・平地の三つの要素に分類することができ、その分布状況は第11図に示してある。山地は遺跡付近では海抜20ｍないし50ｍの高度で北に傾き、各山脚の横断面形は凸形斜面を示している。古郡家南の山脚はとくに平滑で、森福寺や中臣神社がこの上に建て

挿図11　鳥取市古郡家付近の地形区分



られている。伊勢谷と湯谷の間の山脚もかなり平坦で、遺跡付近に二つの円墳がみられる。山地の地質は第三系堆積岩で、その上に厚さ１ｍ内外の火山灰が被覆していることがある。岩石は表層は赤褐色に風化し土壌化しているが、一般に比較的軟弱である。

台地は図上で斜線で示した部分で、美和や古郡家の集落はほとんどこの台地上に位置していることがわかる。越路の谷ではかなり広い範囲に分布し、一部は河岸段丘状になっている。伊勢谷および湯谷では、谷の中央部は一段低く、水田となっていて、軟かいシルトからなる沖積低地であるが、谷の両側に比高２ｍ内外の崖で限られる一段と高い段丘状の地形があり、その表層はクロボクが被覆し、内部はやや固化した洪積の黄色粘土からなるので、台地地形と考えることができるのである。伊勢谷・湯谷の遺跡はまさにこの台地上に位置することになる。

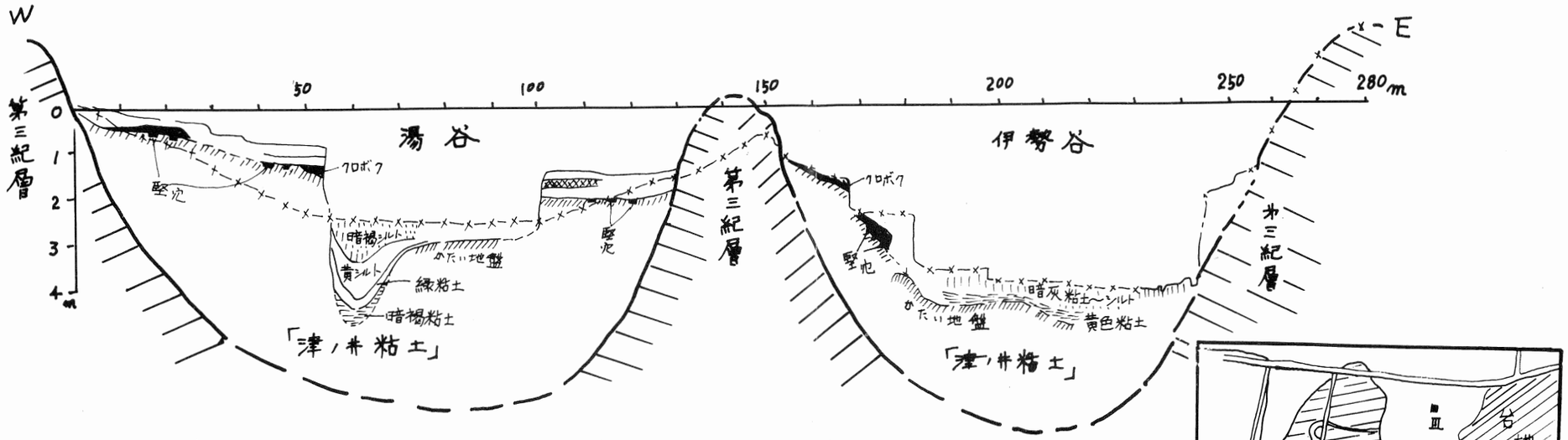
伊勢谷・湯谷の台地は全部が自然のままの地形ではなく、台地に人工を加えて階段状の多くの畑地に改変したものである。したがって、台地表面にクロボクの露出する部分のみが、人間の改変の手が加わってない場所であるが、その範囲はむしろせまく、大部分は多少とも地形を階段化するため、人手が加わっているようである。

伊勢谷・湯谷の低地は、現在そのほとんどが水田として利用されている。この細長い沖積低地は洪積台地面を侵食した谷地形に沖積層が堆積して形成されたものと思われる。しかしこの谷地形はそう深いものでなく、伊勢谷のⅠ区試掘拡、Ⅱ区のトレンチでは比較的浅いところに洪積粘土が出現するのである。

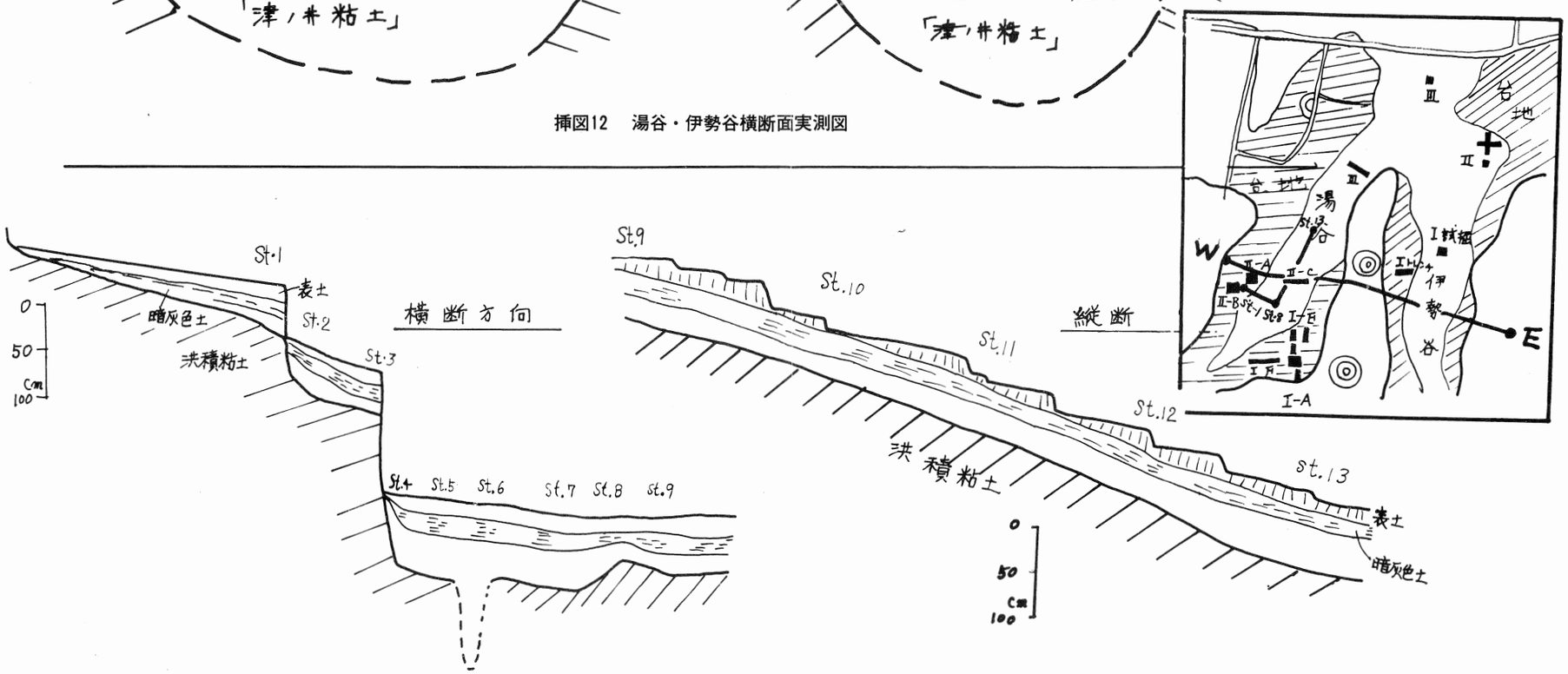
遺跡は洪積層の津ノ井粘土の表面やクロボク下層に刻みこまれているのが一般的であるから、沖積のシルト層の基底の地形を調べると、遺跡のあった当時の地形環境が復元されると考えられる。以下当時の古地理を推定することにする。

３．遺跡の古環境復元について

遺跡の形成された当時の自然環境は、現在とはかなり異なったものであると考えられる。その理由は、台地の遺跡においても20cmないし数10cmの土壌に埋積されており、沖積物によって充てんされた谷底平野では、遺跡や遺物の存在する水準は、かなり地表下深いところに当ると予測されるからである。古環境の推定の基礎となるものは、埋没地形である。そこで埋没地形を判定するため、伊勢谷・湯谷の微地形を実測し、そのルートに沿って検土杖による地下構造の推定を行なった。微地形測量は箱尺とハンドレベルによって行ない、測量間隔は５ｍであった。検土杖は２ｍのものと１ｍのものと併用して地層の検索を行なった。この結果は第12図に示した。第12図の地形横断面図には凸形斜面の第三系山地と比高１～２ｍの台地（津ノ井面）および低地（谷底平野）の三種類の地形が明瞭に認められる。さらに内部構造をみると検土杖で貫入しにくい「かたい地盤」があり、これは洪積粘土（主として黄色粘土）に相当する。この上に一部クロボクが分布するところがあり、この水準が、弥生期から奈良期の生活面に相



挿図12　湯谷・伊勢谷横断面実測図



挿図13　湯谷地区の谷底平野の内部構造

当するらしい。「かたい地盤」以下は粘土質の不透水層であるから、地下水の湧出もこの層準から著しいのである。また多くの堅穴もこの「かたい面」にうがられている。この「かたい地盤」は台地面では地表下50cm内外のところにある。ところが沖積低地ではより深くなる。とくに湯谷の低地の西寄りでは地表下２ｍを越す深度に及んでいて、この部分に当時の渓流が流れていたことが推定され、厚いシルト～粘土の沖積層の堆積が行なわれている。しかしこの埋没河川以外は地表下50～80cmに「かたい地盤」がみられ、当時は、この沖積層下の平坦地は若干の土地利用が行なわれていたと考えられる。

湯谷地区のみについては更に詳しく検討するため、５ｍ間隔で東西方向に断面構造を調べ、また谷の縦断方向にも調査し、その結果を第３図に示した。地層は３層からなり最上部に淡褐色シルトが厚さ10cm内外の表土層をなしており、耕作土壌に相当する。この下に厚さ20cm内外の暗灰色シルトがあり、ややポドゾル化している。この下に灰色～淡黄色の粘土～シルトが存在し、この層の下には「かたい地盤」があり、これはおそらく洪積粘土である黄色粘土と思われる。横断方向を観察すると、台地の上位面は３種の地層の厚さが薄いが、下位の面になるほど厚くなり、沖積面下では70～90cmと相当厚くなる。また縦断方向では下流に向って次第に沖積層が厚くなることが明らかである。

４．伊勢谷地区のトレンチの層序

〔Ⅰ区トレンチ〕

このトレンチは洪積台地上にあり、厚さ30cmに達するクロボク下の黄色粘土の地盤に若干の堅穴様の痕跡が認められ、クロボク下層からは弥生土器片が出土している。またクロボクの上位の黒褐色土中から古墳期～奈良・平安期の土器片がみられる。黄色粘土の面は東側の部分は自然の堆積面であるが、西側の傾斜の緩な部分は人工によって平坦化したものと思われる。赤褐色シルト中には酸化鉄の赤斑があり、地下水によって鉄分が析出したものであろう。最上部の灰色シルトは耕作土に相当する。

〔Ⅰ区試掘坑〕

Ⅰ－Ａのトレンチの位置より一段低い地形に存在するトレンチの断面であるが、層序関係はほぼⅠ－Ａと同様であり、洪積粘土の上の古い地形面は北側に認められ、南側のやや平らな黒褐色土下の面は人工による削りとった部分を示している。

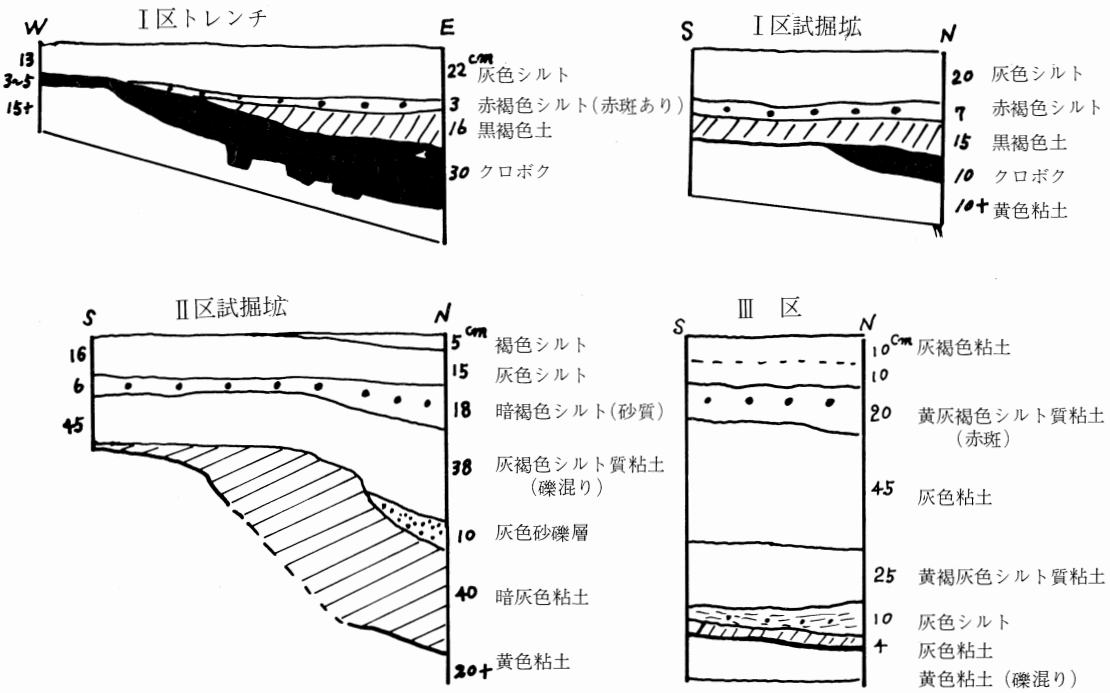
〔Ⅱ　区〕

このトレンチはⅠ区トレンチに比べてかなり下流の沖積平地にあたるので、沖積堆積物はかなり厚くなっている。沖積堆積物の下層をなす暗灰色粘土層からは古墳期の土器片が出土している。このトレンチの北側では谷地形が刻まれており、暗灰色粘土層が急に厚くなっている。この暗灰色粘土中に多数の炭片が含まれることも注目される。

〔Ⅲ　区〕

このトレンチは遺物を全く出土しないが、もっとも下流部にあるトレンチであり、また昨年調査した「古郡家Ｃ地区」に近い位置にある。したがって対比のためにやや詳しく地層の記載をする。

最上位の灰褐色粘土は、より詳しくみると上部10cmが褐色シルトで、下部10cmの部分が灰褐色粘土質である。この下位に黄灰褐色のシルト質粘土が厚さ15～20cmでみられ、酸化鉄の赤斑が多数みられる。灰色粘土中には若干の礫が混在し、この礫は径１～３cmの円礫が多くみられる。さらに下位に角礫混り（径１cm以下）の黄褐灰色のシルト質粘土がみられる。さらに灰色のシルト・灰色の粘土があり、その下にかなり固化した黄色粘土（風化した礫岩のようでもある）があり、この間から地下水が湧出している。この部分が沖積の軟かい堆積物と津ノ井粘土層との境界と考えられる。



挿図14　伊勢谷地区のトレンチの層序

5．湯谷地区のトレンチの層序

〔Ⅰ区－F〕

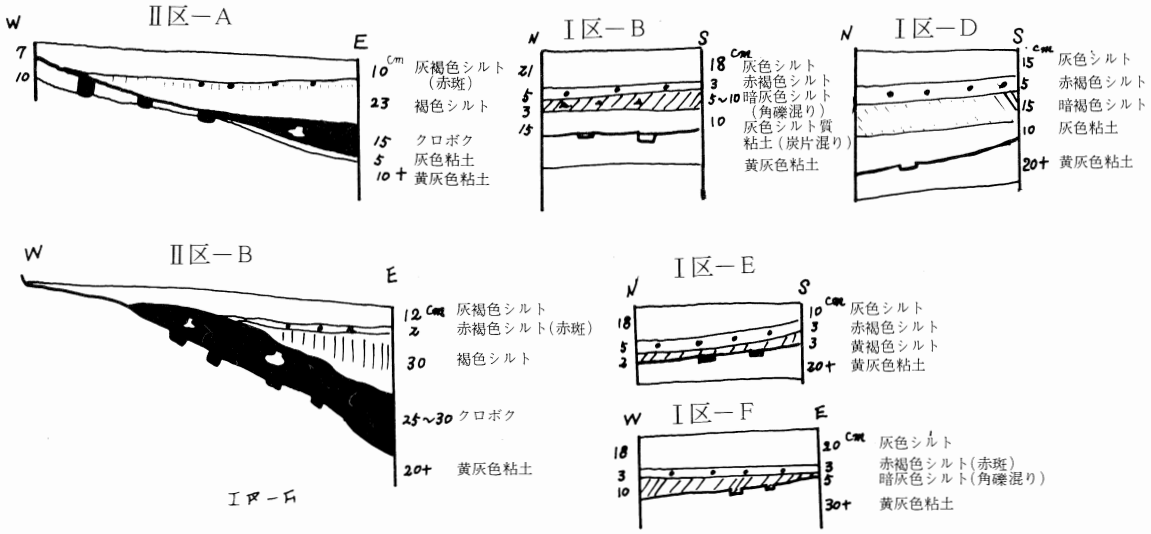
暗褐色シルト中には炭片多数と須恵器片が認められる。また遺構中に弥生～土師の土器片が若干出土する。

〔Ⅰ区－A〕

Ⅰ－Aとほぼ同様である。両トレンチとも台地上にあり、東南に面した緩斜面に位置する。そしてすぐ前には平野下に埋没谷があるので当時は渓流が流れていたと想像され、水の便がよく、高燥な水はけの良好な居住地であった。黄色粘土は堅い地盤で家屋の基礎として好適であった。

〔Ⅰ区－B〕

このトレンチにはもっとも注目される遺構がみられる。クロボクの下には柱穴多数が認められ、クロボク上位には奈良期までの須恵器片など多数包含されている。このトレンチの西側では黄灰色粘土の面が平坦にきられており、おそらく階段耕作のため削られたものと思われる。

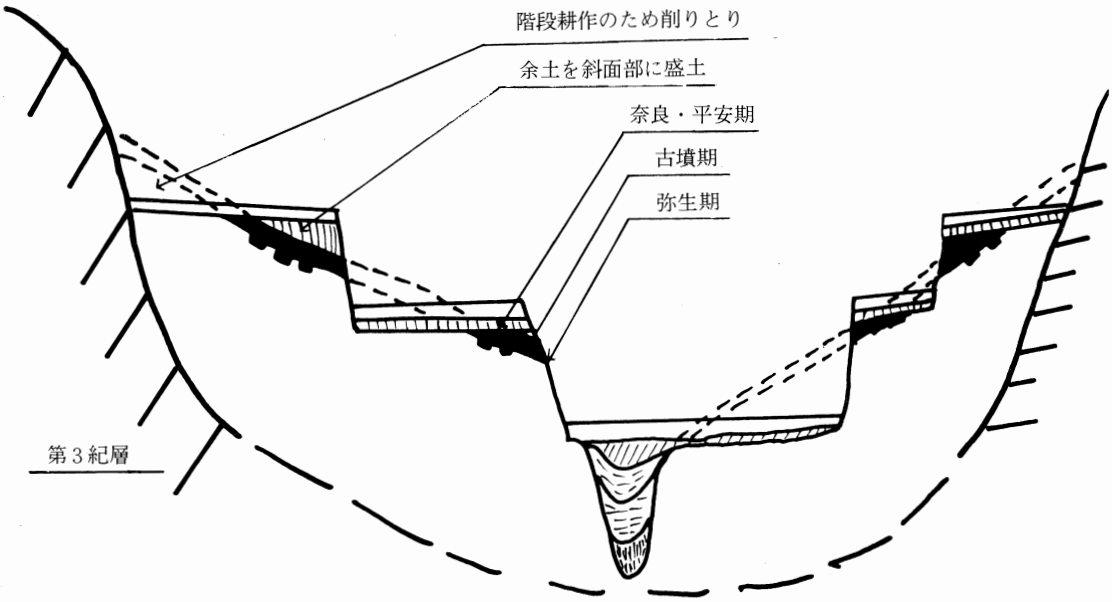


挿図15　湯谷地区のトレンチの層序

6．結　　語

伊勢谷・湯谷の遺跡地は、第三系の山地に形成された谷底平野に沿って形成されているが、詳細にみると、谷底平野に臨む台地の面上に形成されている。この洪積台地はかなり地耐力の大きな粘土層からなっていて、建築の良好な基礎地盤を提供するとともに、風蔭でかつ東南に面した日照条件の良好な湯谷Ⅰ－A、B地区に、特に住居址が集中したものと思われる。また、この地区の前面に当時渓流があり、水利も良かったと推理されるのである。弥生～奈良期に至る時代はクロボクの形成期でもあるが（より正確に云えば上部クロボク)、この時期には開いたV字状の谷地形であった。その後の谷川の側浸食によって現在みられるような谷底平野に拡げられ、沖積物が次第に堆積されてきた。また歴史時代に入ってから台地面の開墾が行なわれるようになり、クロボクの面を一部削り一部埋めたてて、階段状耕地を人工的に形成したものである。このような地形や遺物包含層、遺構の関係を第16図に示した。

谷底平野に水田遺構は確認されていないけれども、豊富な湧水や渓流の水を利用して若干の水稲栽培が行なわれたであろう。住居のある台地一帯では若干の畑地が経営され、背後の第三紀山地では薪炭材の利用や墓地として利用が行なわれたであろう。



挿図16　湯谷の模式横断面

ま　と　め

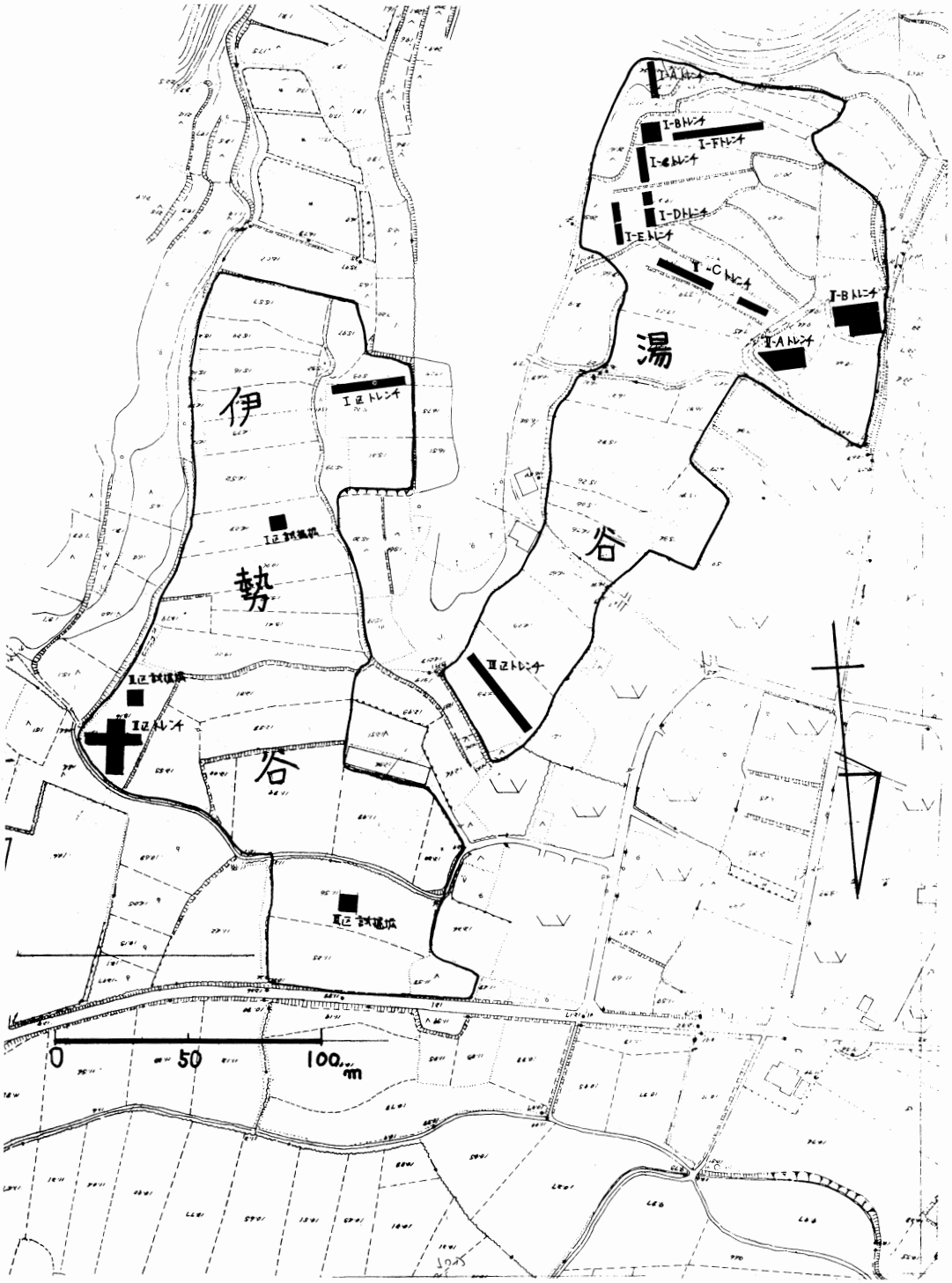
1．今回の伊勢谷・湯谷遺跡発掘調査によって遺構のみられた地区は、伊勢谷Ⅱ区と湯谷Ⅱ区を上げることができる。当初推定された伊勢谷遺跡の郡衙、生活址、水田址等の全様を知る段階には至らないものであるが、この谷のもつ遺跡としての性格の位置づけをすることができる。

2．伊勢谷Ⅱ区における支柱を残す建築遺構については、その規模や性格を立証するものは得られなかったが、その時期については、遺物包含層を土台としていることから、相当新しい時期のものと思われる。正確には支柱に使用された木材の分析によって明らかにできよう。

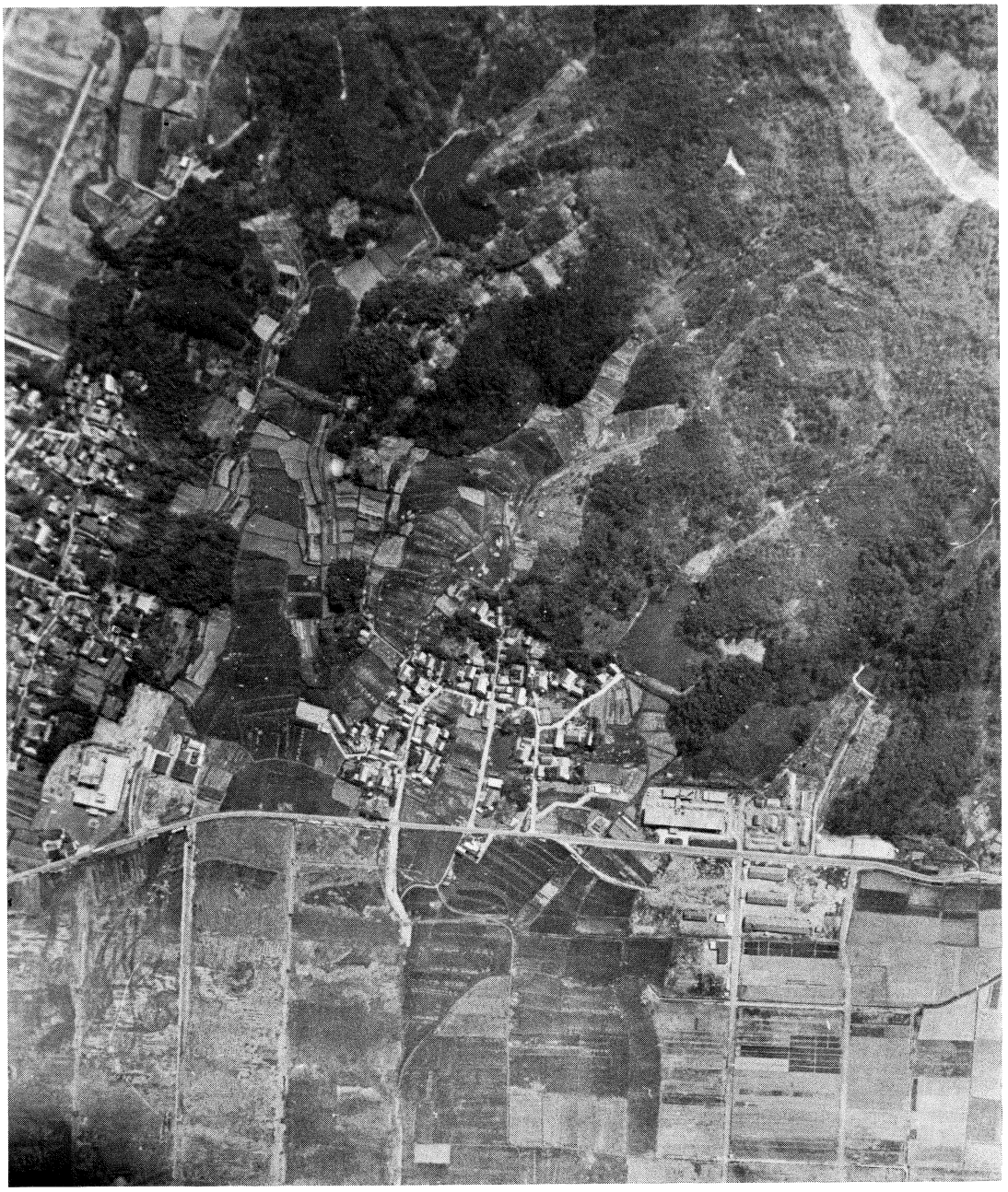
3．湯谷地区における遺構は、いづれも後世における土地造成による削平が著しく、遺構の性格等を知ることはできなかった。またトレンチの拡張が狭まく、遺構の規模について把握できなかったことは、伊勢谷Ⅱ区と同様反省課題として残されている。

4．伊勢谷・湯谷ともに古墳期から奈良・平安期に至る遺物が、少ないながらも全体量からみると大部分を占めていることは、この谷の開発事業が古墳時期から行なわれたことを意味するものであろう。また、磁器類も若干みられることは注目されるところでもある。

5．発掘調査の時期が晩秋から冬期間に実施したことは、山陰の降雨、降雪期にあたり、低湿地における調査をより困難にする要因ともなっている。十分な調査を行なうためにも季節的条件を加味した計画が必要である。

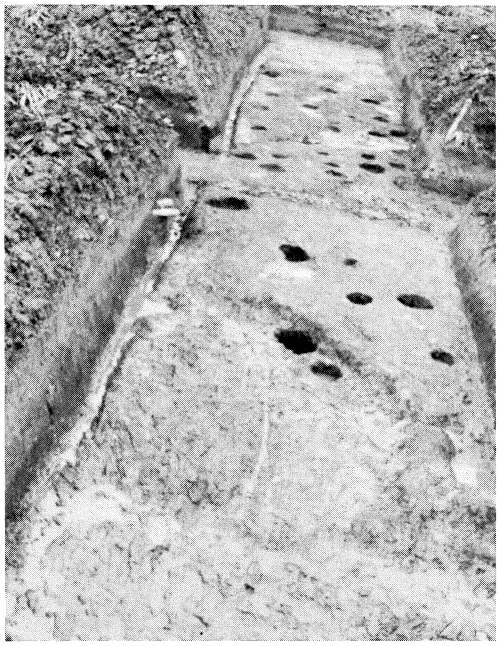

伊
勢
谷
湯
谷
I-A トレンチ
I-B トレンチ
I-F トレンチ
I-G トレンチ
I-D トレンチ
I-E トレンチ
I-C トレンチ
I-B トレンチ
I-A トレンチ
I区トレンチ
I区試掘坑
I区試掘坑
I区トレンチ
II区トレンチ
II区試掘坑
0
50
100m

挿図17　調　査　位　置　図



図版１　伊勢谷(左)　湯谷(右)全景　　(北より)

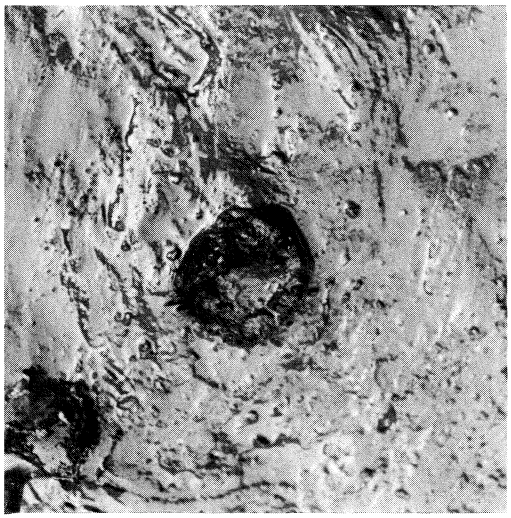
伊勢谷Ⅱ区東西トレンチ（西より）



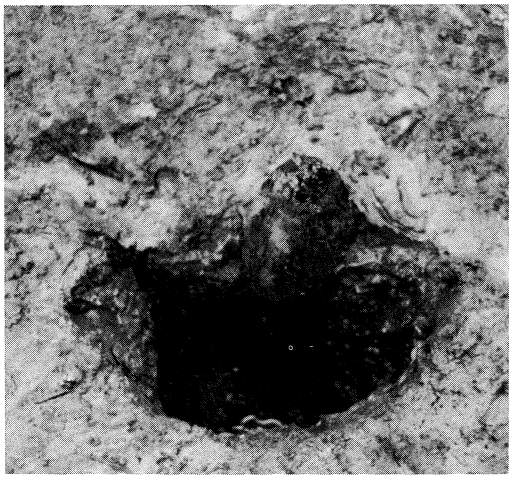
伊勢谷Ⅱ区南北トレンチ（南より）

図版2　　伊勢谷Ⅱ区試掘坑

伊勢谷Ⅱ区東西トレンチ遺物出土状況



伊勢谷Ⅱ支柱区検出状況



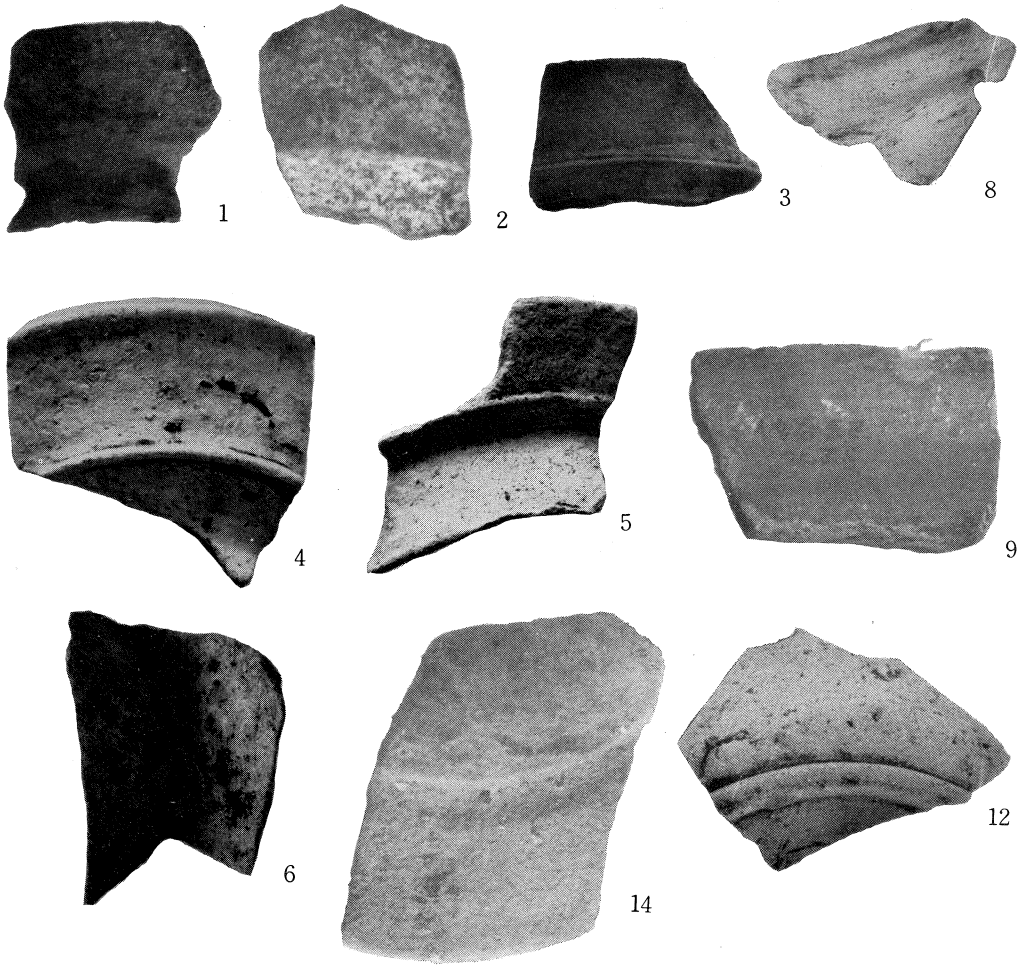
伊勢谷Ⅱ区支柱検出状況

図版 3

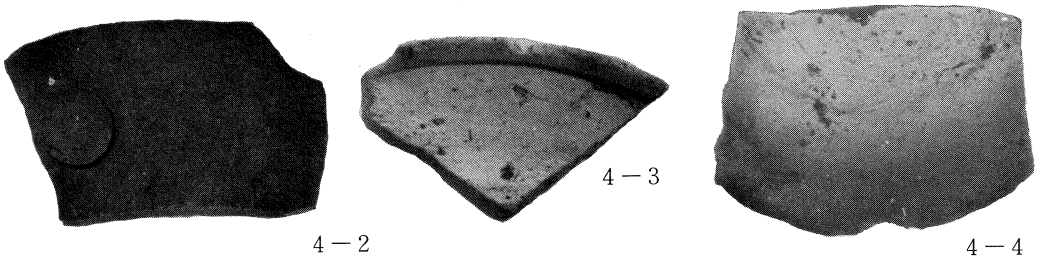
図版4　湯谷Ⅱ－A区　　東より(上)　西より(下)

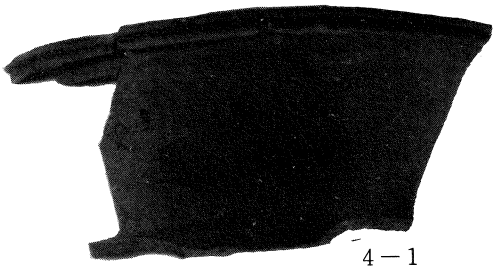
湯 谷 1 — C 区

図版 5　　湯 谷 全 景



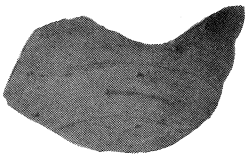
図版 6





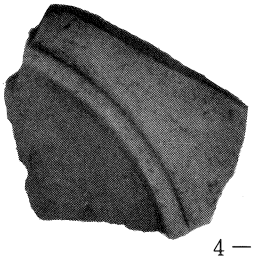
4－1

4－6



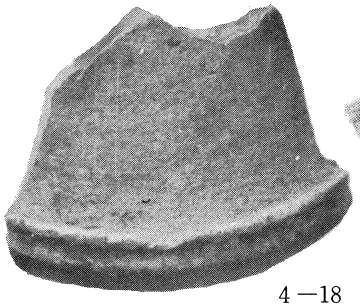
4－8

4－14

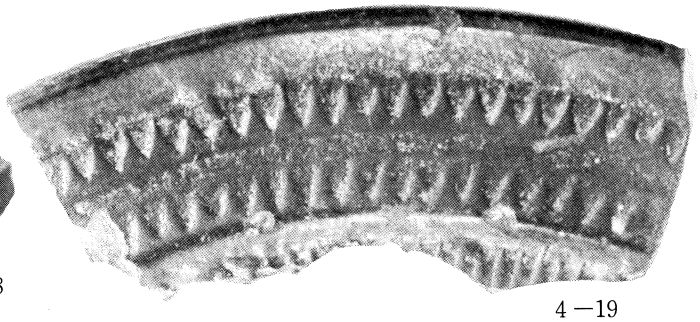


4－15

4－16



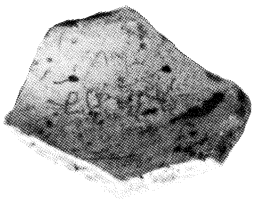
4－18



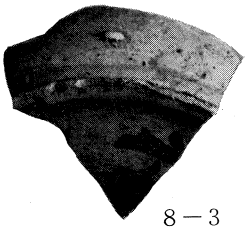
4－19

図版 7

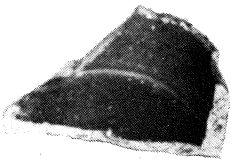
8－1



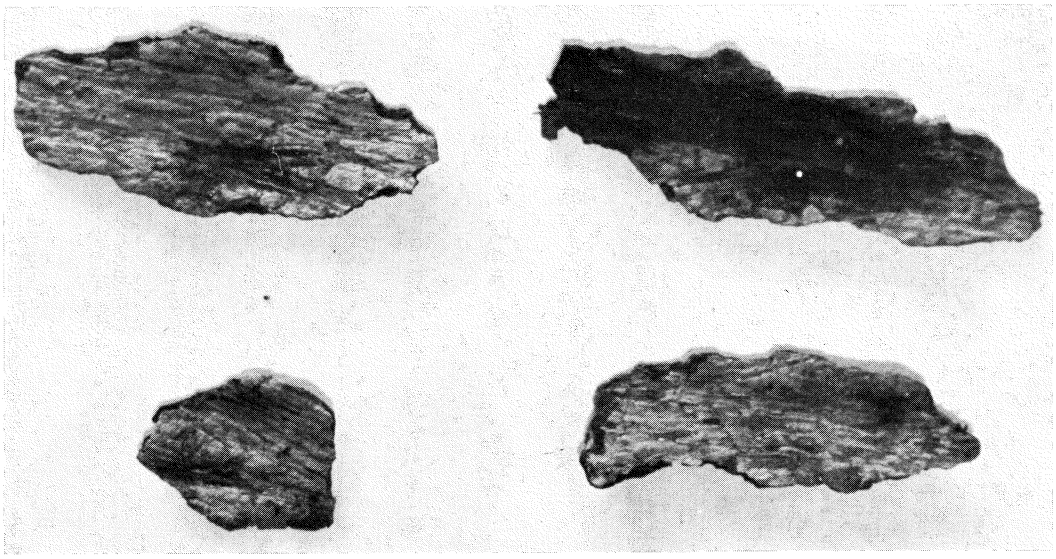
8－2



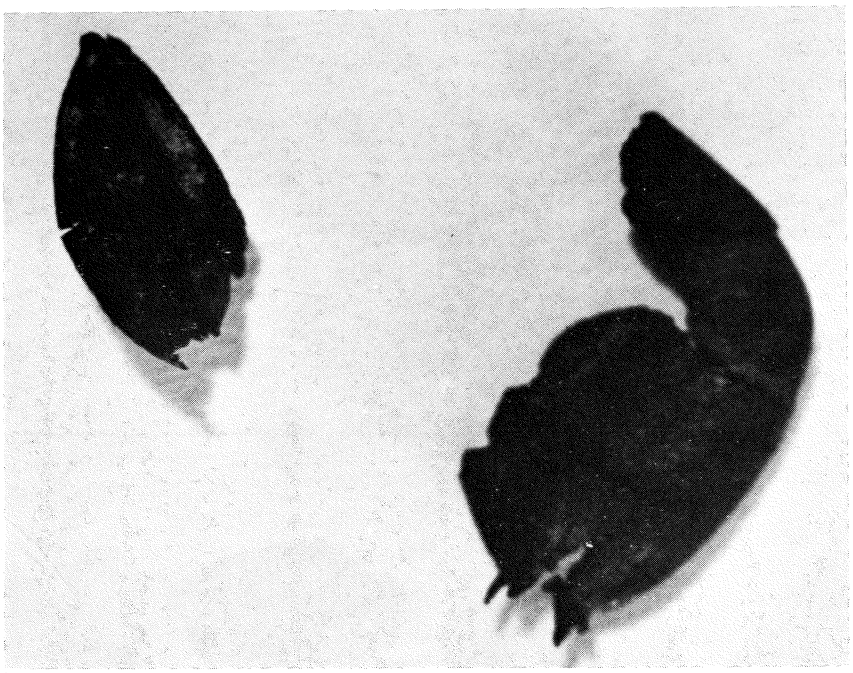
8－3



8－4



8－5



8－6

図版 8